JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	人文学研究者は研究の質・価値をどう認識し評価しているのか
Author(s)	押海, 圭一
Citation	年次学術大会講演要旨集, 39: 648-650
Issue Date	2024-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/19564
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

２Ｂ０７

人文学研究者は研究の質・価値をどう認識し評価しているのか

○押海圭一（国文学研究資料館，政策研究大学院大学）
oshiumi.keiichi@nijl.ac.jp

1. はじめに

研究評価は、研究活動を活性化し研究の質を高めるとともに、国民を含む研究費の出資者への説明責任を果たすためにも必要であり、「第５期科学技術基本計画」等の政策文書内でも適切な研究評価実施の必要性が強調されている。さらに近年では、研究の学術的価値のみならず、研究の社会的役割の重要性が増すとともに社会的価値（＝社会的インパクト）の適切な評価も求められている。

研究の学術的価値は、同分野の研究者のピアレビューによって評価されることが一般的である。しかし、ピアレビューは、コストがかかることや明確な基準がないことによる一貫性の不足等の問題点が指摘されており、それを補助するために、学術的価値を定量的に示す指標の活用が求められている。そのような定量的指標として、自然科学系研究ではビブリオメトリクスと呼ばれる、Web of Science や Scopus のような英語論文中心の引用索引データベース(Citation Index Data Base、以下「CIDB」とする）の被引用データが用いられる。他方で被引用データなどの定量的データについての問題点も指摘されており、欧米の研究者コミュニティを中心に、2012 年に「研究評価に関するサンフランシスコ宣言[1]」、2015 年に「研究計量に関するライデン声明[2]」が発表され、さらに 2022 年には Coalition for Advancing Research Assessment（CoARA）が発足し、定量的評価への過度な依存をやめ、責任ある研究評価を実施することが求められている[3]。また、社会的価値の評価には学術界以外の観点も必要となるため、従来通りのピアレビューでは難しく、評価に活用可能なデータ整備も進んでいないため、確立した評価手法はいまだ存在しない。

次に、人文・社会系研究評価特有の課題として、研究成果の量的把握と質的（学術的価値、社会的価値）把握が難しいことが挙げられる。人文・社会系研究は英語論文による成果発表が一般的でない分野も多く、それらの分野の研究成果の多くは国際的な CIDB には掲載されないため、研究成果の量や被引用（≒学術的価値）の把握に使えるデータが不足する。そのため、人文・社会系研究の評価は定量指標を用いないピアレビューによることが多くなるが、その結果の妥当性は研究者ではない者には判断が難しいことも多く、研究費の出資者側から、社会的な説明責任を果たしていないという批判を受けることにもつながる。そのため人文・社会系研究に対しても自然科学系研究と同様にビブリオメトリクスによる定量的評価が行われることもあるが、その場合は研究成果データのカバー率が低いなどの理由から人文・社会系研究者に不利な評価になることも多い。

上記のように研究評価についての課題は多いが、その一方で研究評価システムの導入は世界的に進んでいる。世界大学ランキングのような私的機関によるものだけでなく、国内外で政策的にも導入が推進され、日本においては、国立大学法人第３期中期目標期間（2016 年度～2022 年度）に一部の研究志向の国立大学の評価指標として運営交付金等コスト当たり TOP10%論文が採用された。さらに、イギリスでは Research Excellence Framework （REF)と呼ばれる大学の研究評価制度の中で、研究の社会的インパクト評価が導入された。

このように、研究の質を高めながら説明責任も果たすことのできる効果的かつ現実的な研究評価方法は未だ確立していない中で、そのような研究評価に対する要求はアカデミアの内外から高まっている。その一方で評価システムの導入は着実に進みつつあり、適切な研究評価手法の開発のためのエビデンスとなる実証的研究の必要性は高まっている。

このような状況の中で、本研究は「人文系研究者が暗黙知として持つ、研究の「質」（学術的価値、社会的価値両方を含み得る）概念はどのようなものか？」ということを明らかにすることを目的としている。ピアレビュー制度が成立するためには、同じ分野、もしくは近い分野の研究者の間には研究の質についての合意があることが前提であり、そのような合意が明示されていないことが研究評価の曖昧さにつながるという理解のもとで、今まで研究者間では暗黙的には共有されているが、明示されていなかった研究の「質」を明らかにしたい。

2. 先行研究

研究の「質」概念に関する先行研究として、Ochsner らがヨーロッパにおける人文系研究者の持つ研究の「質」概念を明らかにするためのプロジェクトを実施し、その中でレパートリー・グリッド・インタビューとデルファイ調査を組み合わせることで、特定分野の人文系研究者がそれぞれの研究分野内で合意可能な研究の「質」概念を明らかにしている[4][5]。この研究の中で使われているレパートリー・グリッド・インタビューは、臨床心理学者であった Kelly がパーソナル・コンストラクト理論をもとに開発した手法である[6]。その理論では、まず、人間は経験を通じてコンストラクト・システムと呼ばれる各人に固有の認知構造をつくりあげ、その認知構造によって環境およびそこでのさまざまなできごとを理解し、またその結果を予測しようと努めている、という人間モデルを設定する。コンストラクトとは、人間が目や耳などの感覚器で知覚した環境を意味のある世界として理解する際の認知の単位で「窓が大きい-小さい」や「室内が明るい-暗い」といった性格を持つ一対の対立概念であり、コンストラクト間には「窓が大きいと室内が明るい」というように因果関係が存在する。インタビューでは、エレメントと呼ばれる刺激を複数提示して比較させ、類似点あるいは相違点を自由に回答してもらうことにより、被験者のコンストラクトを被験者自身の言葉で抽出する。具体的に何をエレメントとするか、その数、提示の方法、比較の方法については調査対象・目的に応じて研究者の裁量にまかされており、コンストラクト相互の関連を追跡するためのラダーリングという手法も使われる。

このレパートリー・グリッド・インタビューを発展させて開発された手法に、評価グリッドインタビューがある[7]。コンストラクト・システムのうち環境評価に関与する部分、すなわち、環境評価構造だけを効率良く抽出するという目的で開発され、レパートリー・グリッド法が単にエレメント相互の類似点や相違点に焦点をあてていたのに対し、エレメント間の優劣を判断させ、その判断基準に焦点をあてれば、評価に関与するコンストラクト、すなわち評価項目だけを選択的に言語化し、抽出することができるという考えに基づく。

本研究では、評価グリッドインタビューとアンケート調査を使って人文系研究者の持つ研究の「質」概念を明らかにすることを目指す。なお、人文・社会系研究者ではなく人文系研究者に限定したのは、人文・社会系になるとかなり分野も幅広くなり、インタビュー調査およびアンケート調査を実施するのが困難になると考え、まず人文系の限定した分野から始めることが適切と考えたためである。

3. データと方法

評価グリッドインタビュー

評価グリッドインタビューにおいては、以下のような流れでインタビューを行うことが一般的であり、本研究でも同様の流れでインタビューを実施した。

1. エレメントの選定

研究対象環境のさまざまなバリエーションを相互に比較できるような形式で表現したエレメントを作成する。本研究では論文、図書など研究成果の種類をエレメントとして設定したが、設定に際しては査読の有無、発表言語、単著・共著など重要度に関わると思われる要素を分割してエレメントを設定した。

2. エレメントの分類

インタビュー対象者にエレメントを分類してもらう。本研究では五段階の分類を求めた。

3. 評価項目の抽出

最も評価が低い（最下位）グループと、その次に評価が低いグループを最初に比較し、評価項目を被験者自身の言葉によって抽出し記録する。その後も低いグループ群とその直上のエレメントを比較し、理由を聞く。被験者が新しい評価項目を容易に見出せなくなった場合に次の組み合わせに移る。

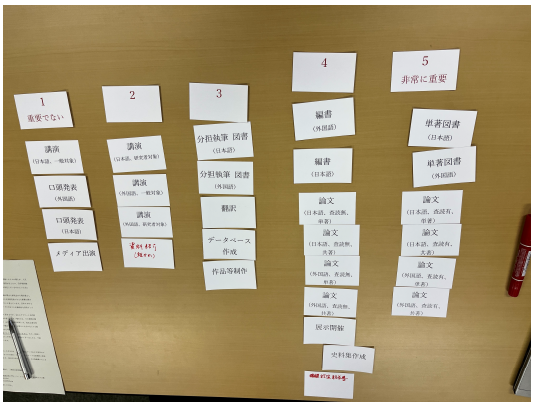

図 1評価グリッドインタビューの様子

4. ラダーリング

あるコンストラクトの上位・下位のコンストラクトを抽出するための技法であり、抽象化して上位概念を尋ねる方向に向かうラダーアップと具体例を尋ねる方向に向かうラダーダウンがある。

インタビュー対象は、発表者が所属する大学共同利用機関法人人間文化研究機構に属する国立歴

史民俗博物館所属研究者５名、国立国語研究所所属研究者５名、さらに私立大学所属の研究者１名の合計 11 名である。

アンケート調査

アンケート調査は 2024 年 4 月 26 日～5 月 13 日にかけて人間文化研究機構に属する６機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）の研究者 277 名に対して実施した。所属、性別、年齢、職階、科研費研究分野がわかる形で回答を求めた上で、先述の Ochsner 論文で挙げられた研究の質を表すと考えられる 19 の項目について、同意できないから同意できるまで５段階のリッカート尺度を用いて回答を求めた。

4. 結果と分析

データは分析中のため、結果及び分析内容は発表時に示す。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K00271 の助成を受けたものです。

参考文献

[1] The Declaration on Research Assessment (DORA) , **研究評価に関するサンフランシスコ宣言**, https://sfdora.org/read/read-the-declaration-japanese/

[2] Hicks, D., Wouters, P., Waltman, L., de Rijcke, S. and Rafols, I. The Leiden Manifesto for research metrics. **Nature**, **520**(7548), 429-431

[3] Coalition for Advancing Research Assessment (CoARA) , The Agreement on Reforming Research Assessment, https://coara.eu/app/uploads/2022/09/2022_07_19_rra_agreement_final.pdf

[4] Ochsner, M., Hug, S. & Daniel, HD. Setting the stage for the assessment of research quality in the humanities. Consolidating the results of four empirical studies. **Zeitschrift für Erziehungswissenschaft**, **17** (Suppl 6), 111-132(2014)

[5] Ochsner, M., Hug, S.E., Daniel, HD. (2016). Humanities Scholars' Conceptions of Research Quality. In: Ochsner, M., Hug, S., Daniel, HD. (eds) **Research Assessment in the Humanities.** Springer, 43-69(2016)

[6] Kelly, G., **The Psychology of Personal Constructs**: Volumes One and Two, Norton (1955)

[7] 讃井 純一郎, 乾 正雄, レパートリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出 ： 認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(1), **日本建築学会計画系論文報告集**, **367 巻**, p.15-22